リノベーションまちづくり構想策定会議第1回公開検討会議(第1回策定部会)

開催日時 2019.10.28 (月)18時~20時40分

開催場所 なはんプラザ (定住交流センター) 1F

出席者 当日資料のとおり

一般参加者 37人

18:00-18:10<ガイダンス:事務局 伊藤>

エセナ跡地は広場に生まれ変わって、そこで色々な活動が生まれている。7月のオープニングセレモニーでは、模擬結婚式やパーティなど広場の新たな使い方が提案され、花巻祭りにおいては屋台が並び桟敷のような階段のベンチは満席、子供たちはスロープで遊んでいた。このように街に新しい風景が生まれつつある。

花巻市では、リノベーションまちづくりを始めている。きっかけとなった二つの民間事業者によるプロジェクトがあった。小友ビルとマルカン食堂。2015年に小友ビル、2016年度にマルカン大食堂が復活した。2017年から都市再生室主導でリノベーションまちづくりを学ぶためのスクールを開催。そこをきっかけにゲストハウスmeinn、中華料理蓮、そして駅前にブリューワリー「Lit work Place」など、町に新しいお店ができ、お客さんが訪れている。

リノベーションとは、すでにあるものの使い方や機能を変え、付加価値を高めること。

リノベーションまちづくりとは、広報紙やHPで紹介しているが、今ある資源を新しい使い方をして新しいビジネスを起こし、一定エリアに集中させながらエリア全体の魅力を上げていくこと。既存の空間資源を暫定的に利用して、新しいビジネスで産業を興し、ビジネスを回しながら地域に再投資して、経済の地域内循環を上げようという試み。この手法を使って、様々な理由で衰退したシャッターのまち、商店街、花巻のまち全体をもう一度元気にしていくもの。

市の取り組みは平成28年に策定した立地適正計画が基になっている。4つの生活拠点を守りながら、都市機能誘導区域、居住誘導区域に一定の人口密度、都市機能を残していこう、ということが書かれている。その中にリノベーションまちづくりが含まれている。

本計画の文中「活力があり、持続的に成長する都市づくりの実現を目指す」こととしてコンパクト+ネットワークを進める記述がある。こういう形で公共交通の再編を盛り込みながら、都市機能の誘導という形で広場の整備、病院の移転などまちの機能をしっかりしていこうという取り組み。まだ、これからやることはあり、家守構想の策定、公的不動産の積極的な活用も盛り込まれている。これらを進めるためにはどうしたらよいか。あの手この手を具体的に示す作戦が必要。まだはっきりと決まっていない。それをリノベーションまちづくり構想という形で戦略的に作っていきたいというもの。

広場のような公共空間を、民間の提案、民間の優れた事業力で魅力的に使いこなし、地域 経済や担い手の育成に波及させていくことを、公民連携という。この構想は、これからの公 民連携を導入するための考え方についても整理できる重要なきっかけになる。そして、まち なかに展開するリノベーションまちづくりが、公的不動産のリノベーションと連動的に展開することで、一定エリアにおけるビジネスの集積や多様な活動のコーディネート、活発なコミュニティの育成など、複数の地域課題を同時に解決されることが期待できる。

構想には、未来のまちを自らが作ることを念頭に、生産的な意見を取り込み、行政と民間 事業者と市民が、互いにできることと強みを生かして実践していくシナリオを描きたい。

今日は福祉と建築というテーマに絞って考えてみる。お聞きいただく前に、論点をご案内 する。

一つ目は、構想に必要な要素を整理したい。話を聞きながら、共感したこと、自身が大事としていることを表現していただき、実現の際に課題と感じていることを考えてほしい。自 分の目線で考え、自分が主役と思って参加願う。

二つ目は、みなさんからいただいた意見を構想にする際に整理するために、5つの要素で章立ては以下の骨組みで作る。そのほかに必要なことがあれば、章立てしたい。手元資料に論点が書いてある。大きく5つの構成。まず、まちなかの一日、将来のまちなか。暮らしの質感がわかるものがあれば、行政・事業者・市民のみなさんが一つのイメージを共有できる。次に、目的位置付けが書かれていること。そして、公民連携の背景と理念。4番目に公民連携の対象と手法、推進体制。最後にリノベーションまちづくりの成果指標。短期の期限で目標設定する必要がある。どこまで行くことを目標とするかを明確にする。

実際、構成よりも重要なのは論点の一つ目。この論点を、楽しく考えていければ。私たちが望んでいる風景、行政も民間も事業をとおして表現し、市民もそれを理解・応援しながらここに住んでいてよかったという誇りとともに、次世代へと繋いでいく。笑顔でお話ししたい。

先に、宣伝として、12月23日に山崎満広さんと竹内昌義さんのシンポジウムを行う予 定。ぜひご覧下さい。本日はどうぞよろしくお願いする。

18:10-18:20<挨拶:長井副市長>

お忙しい中お集まりいただき感謝。

まず報告したいことが。夏以降に3キロ痩せた。

どんなまちづくりが良いかという議論をこれまで進める中で、「健康的なまちづくり」というキーワードが。まず自転車に乗れ!と言われ、自転車で通勤するようになった結果、3キロ痩せた。何が言いたいかというと、委員会で実施しているのは今日からできることをやっているからできた。自分のやりたいこと、簡単にできることから議論をしていることを知って欲しかった。

今日は関係者で市内を中心にエネルギーに関する視察を色々してきた。遠野市のチップボイラーを使っているデイサービスセンター、花巻のバイオマスエナジーなど。

地域の中でお金が回らず外に出て行ってしまっている。エネルギーの部分では顕著。地域 外にキャッシュアウトしている。地域の中でエネルギーも地産地消しようと視察してきた。 サンポットさんで断熱と、地中熱を活用した家を体験。外が寒かったが、断熱している家は暖かかった。断熱の部屋に入るとこんなにもあったかいのかと。断熱の凄さを味わった後に竹内さんの話を聞くことができる。ということで楽しみにしている。

週刊紙でも書かれているが、暖かい家にすむと、健康的になるとも言われている。

まちづくり、つくっていくのは住んでいる方々。健康であることは大前提。今日は健康という面からも細谷先生から貴重なお話が伺える。

何のためにこの委員会をやっているかという目的には、花巻市においてリノベーションま ちづくり構想をつくるためのもの。まちづくり構想は何をするのか。

まずは上町通りの遊休不動産を活用しよう。令和2年度までに4分の1は活用されるようにしよう。上町エリアの公共施設、プロムナードなどの維持管理コスト510万円かかっているものを、令和2年度までに310万に落とす。また、リノベーション事業について令和2年度までに15件、リノベーション案件を促進したい。

今回構想をつくるにあたり、行政は何をしたらいいか、何をしてはいけないのか、今できていないことは何か。を委員の方から意見をいただきたい。構想にどういうものがあれば、どういう形式であればいのか、行政が作ると行政寄りになる。小さいことでも構わないので民間の皆様から話を聞きたい。

18:20-18:30<テーマ説明:青木座長>

リノベーションまちづくりを進めていく中で、リノベーションまちづくりのエンジンとなるリノベーションスクールなどの取り組みをこれまで進めてきた。その当事者として、今回お話をさせていただく。固い会ではない。こう見渡しただけでも、色々な方がいらっしゃるのがわかる。年齢もさまざま。

みんなという言葉は非常に危険。みんなという対象は結果でしかなく、初めから見えるのは「自分たち」だけ。結果として誰もが幸せになればよいが、最初からみんなという抽象的なワードを使うと何も見えなくなる。今回も、みなさんが、自分たちの視点を持って語っていただくのが一番大事。

このまちを、違う視点で長井委員長が実感することが大事だった。このまちは起伏があり、自転車には向いていない。だからみんな車だという。しかし小友副委員長は自転車ばかり乗っている。起伏があるから自転車が楽しいと。自転車があると中心部だけでなく、周辺に広がる農村部など行動範囲が広がる。多様な暮らし方ができることを委員長にも実感してもらいたかった。長井副市長は言うだけでなく、自分もやったから自分も痩せた。求める側が自分も変わることで責任を持った。生産的な意見は言ったきりではない。結果にコミットすることが大事。

リノベーションまちづくり構想を策定するにあたってこれからの日常の暮らしを考えると、健康は切っても切り離せない。公共空間活用やエリアリノベーション事業を通じて、花 巻の暮らしが健康面ともっと密接な関係ができるのではないかと考える。 委員の人だけでなく、ここに座っている方、みんなで意見を出していけたらいいなと思っている。ぜひ自分事として話を聞いてほしい。

今日は、前向きな意味で記録に残る場。次に繋がっていく機会になる。

住むと働くと豊かさをどう実現していくか。健康・建築は大事な要素なのではないかと思う。

18:30-19:15 < レクチャー「人生100年時代のまちづくり」: 細谷氏>

総花的な部分をどのように考えていくのかをお話しする。

自分は内科医でありコミュニティーデベロッパーもしている。ホテル経営なども。そして、秋田県庁の様々な人と勉強している。横手市は花巻の横。

地域医療と都市経営の課題。横手市で何が起こっているか。看護師が不足して、病院でブラックなことが起こり、辛くなり、より辛くなっていく。医者の後継者の不足。なぜかというと、東京で医者になって、結婚して、子供ができて、岩手に帰ろうと言ったら、パパだけ帰っていいのよ。ということが起こっている。医師の高齢化が進み、テクノロジーの進化から遅れていく。

心臓血管外科という領域は手術に時間がかかり高度な医療環境を要する。

花巻には中部病院や岩手医大など、心臓の血管が切れた時に対応してくれるような、バックアップしてくれる医療があるのは大きい。秋田県は心臓の手術ができるのが3人しかおらず心臓外科医療が不足している。

医師不足の対応として遠隔診療があるが、医者としては医療収入が1/10になるので、広がらない。在宅医療については、1か月に2回訪問することになるので、これも医者側の負担が大きい。医療費が増加しても、医療に関する事業利益や収入が地域の中に投資されれば、常に循環して悪いことではないはず。医療費が増えて、薬や医療技術の高いドイツなどに出て行ったりしていて、国外に地域全体のお金が逃げている。

地域で医療を守るための対策法は

- 1.看護師や医師の妻にとっての魅力アップ(女性)
- 2.高齢医師と若手医師のコラボ
- 3. 本当に一の危険性があるものをどれだけ減らせるか
- 4. 地域救急急心血管センターの適正設置
- 5. 総合病院の合併と開業医連携の充実
- 6. チームの形成が重要
- 7. 慢性疾患・癌治療が出来る病院は県で一つ程度あれば良い
- 8. 採血もコンビニで出来るようにしておけば良い、そのデータをスマホで管理すればいい
- 9. 医師向け地域投資ファンド
- 10. 社会的医療推進(公民連携)

と考えており、今日は特に9、10をお話しする。

地域に貢献することで、さらに地域に貢献し、子供達が戻ってくる。こういったファンドを考えるのはどうか、と思っている。医療の中にも肉体的・身体的なものを治す医療と、精神的な健康を守るための医療もある。この2つは医療が直接的に関われるところ。この二つを入口に社会的な健康をどうやって手にしていくか。

これが2040年まで続いていく。予防医療に過度な期待をするのはどうかと思う。

医療費を削減することを考えるのではなく、健康にどうやって生きていくかを考えて欲しい。70-80代になると自転車もきつくなる。長生きすると誰もが相対的に弱者になってしまう。そうなっても活躍できるようにテクノロジーを駆使して今から仕込むことが一つ。花巻市はバランスのいいメンバーが揃っている気がする。

社会保障費は年間医療費12兆円、保障12兆円、全体で24兆円。このお金が国内で循環させることが重要。ここが海外への流失に流れなければ良い。そのためには医大生、医療福祉関係者を教育することが必要。医療を行うものが都市経営の授業を受け、経済と医療が連動していることを学ぶことが大事。

私は「医者ときどき異者」。祖父があるとき池袋の土地を買えることになって、それを祖母に却下されて、横手駅前の土地を買った。これほど、女性の一言で街は変わる。

爺さんはもっと変わっていて、駅近くに温泉をほった、それがホテル事業の始まり。今までそんな人はそれまでにいなかった。この街で子供を育てたいと言われる街を作ろうと思った。行政では届かない領域がある。ツイッターの地域ハッシュタグをはじめに作ったのは自分。「#横手」を作ったらものすごい反応となった。

「この大地は未来のこども達からのあずかりもの」そのとおりだと思う。

毎年数百万円をまちづくりに投資している。横手焼きそば、地元のコミュニティイベント、音楽イベントなど。地域に横手焼きそばがあるから活性化するのではない、そこに誰がいるかが活性化を左右すると言われた。

2012年、リノベーション事業でyokotterを実施。高校生との活動。卒業しても、そこで 色々な人が繋がり続けていて、東京で頑張った人もいて、たまに飲んだりしている。多様な 人が出会って、繋がっていく。高校で授業もしていた。が、校長が変わると呼ばれなくなっ た。国立大学へ行く人が少なくなった、などが理由とのこと。こういうことはどこでも起こ る。つまり官民連携の限界がある。だからこそ民間のやるべきことは絶対あるので、続けて 行こうと思っている。

これからの生き方ってどうだろうと思うと、いつもと違う誰かと話をしようと考えている。半分はいつもの人、半分はいつもと違う誰かと一緒にいるような日常、3ヶ月ぶりに会うとお互い何かが成長していて、この積み重ねが大事と思っている。地元の高校生は自己紹介するときにその変化が現れている。

経営している塾「前郷塾」には3つのルールがある。

・素早く失敗すること。

失敗しても、支えてくれるサポーターの力があれば、地域を変えていくことができる。 3打席3安打ではなく100打席5安打でも、サポートの力で確実に成長できる。 地域の若者だけで企画したものを、おじさんたちが一緒に実現する。

- ・役割が自分を育てる。何かの役割に入ること。
- ・自分の変化が環境を変えていく

自分は横手市情報センターの運営役員でもあり、横テレビという取り組みをしている。市の情報発信の番組。これを医療機関の待合室に置こうとしている。1日に市民の5%が外来受診。20日間で市民100%の人数が来る。その人たちが1時間待合室にいる状態。そこで広告費をとれば視聴率高く宣伝効果が得ら、売れる素材だと思っている。

投資家・父親・生涯教育・メディア運営・まちづくりディベロッパー、色々なことができるはず。医者も副業ができる。

風邪で病院に来た20歳の女の子が、風邪が治ったあとにまた来て「私死にたいんです」と言ってきた。誰にも言ったことがないといっていた普通の女の子。誰かに相談していたかと聞くと、オンラインゲームで会った気の合う大人(顔も名前も知らない)に相談していた、と言った。これが若者のリアル。大人には想像もつかない。

こうしたリアルに付き合っていくことが新しい事業を思いつくスタートになる。これは医療だけでは解決できないと感じた。

仕事はあるけれども、魅力的な仕事がないから誰も帰ってこない。という状態。 経営者が嘆願しなければ人を雇えない時代。この10年で全く変わった。

みなさんは人生100年時代をどう生きていきたいですか?

80才で死ねる時代はもう終わっている。その先を考える時代が来た。全ての日本人が"相対的弱者"になりうる時代。文明が進んだからこそ。文明のない時代のように戻ることはない。病気を直すことで不安が解消するとは言えない時代。60歳になってあと30年分生きていく。それだけの貯蓄をそれまでにつくることは現実的ではない、学び続け働き続ける社会が来る。

人間関係による幸せは、プロダクトによって生まれるのではなく、プロセスにある。 美味しい料理が並んでいることよりも、そのプロセスにある会話や体験が幸せに繋がる。 自分がひとつひとつ決めながら暮らしていく幸せ。サービス付高齢者住宅に入っている と、自分で決められない。自分で決めるという幸せがある。

自立を促す教育が必要。今はリコメンド社会に偏ってないか。今の子供は素直。やってといったことはちゃんとやれる、でも自由に企画してといってもできない。それでは、サービスの高い高齢者住宅に入っているのと同じになってしまう。

幸せってどういうことだろう。自分だったら他者貢献が大事だと思っている。

幸福感=誰かの役にたっているという主観的な貢献感。アドラーの言葉。社会に貢献したり融資したりするのがいい。

色々な人たちが、当たり前に存在できる社会。少しだけであっても他者との関わりが良い 形で保たれている状態。おばあちゃんがたった一つのチューリップだけを育てているとして も、それを認めてあげて欲しい。それが、ヒューマンソサエティ5.0となるのでは。

エストニアではテクノロジーを信じる時代から、人を信じ自分らしく生きていく時代へ変換していくことに挑戦している。それで6割くらい仕事がなくなったらしいが、その分新しいやり方が生まれ、テクノロジーが進化している。信頼できるテクノロジーシステムを作り出し、これに任せることで人を信じることができる。

僕は誰かに投資できるお金を得ていたいので不労所得を得ていくことを心掛けている。利益を得る方法はなんでもいい。自分は好きなものに投資している。でも実は好きなことからお金をもらうのは辛い。好きなことには投資し、自分の暮らしは自分でつくろうと努力。健康とは諸処あるけれど、要は肉体的と精神的とによくないといけない。特に精神的な部分は大きい。生きがいがあり周囲との支え合いがある状況。

社会的健康:定義通りのことを実現するのは難しいから、「社会的処方:患者を地域の活動やサービスにつなげるきっかけ」という考え方で健康な生き方を提供することができないか考えている。地域の交流会や、ウォーキングを教えてあげると、それにより孤独感が緩和し、well-beingが向上する。そんな繋がりを作ったらどうか。毎日診療していて、おばあちゃんはデイサービスに抵抗はないが、おじいちゃんは行きたがらないことが多い。何とか頼み込んで促すと「先生の言うことならしかたない」と言うが、1回いくと、超楽しんで帰ってくる。要はきっかけがないだけ。ぜひ最後の瞬間に生まれてきてよかった、と思うような暮らしを作っていただきたい。

今は医療が進んで、病気がどんどん治るようになっていく。これからは、疾病よりも障がいに対する不安や長い一生をどう過ごすかの不安が問題になる。

大事なのは海外から利益を得て、エリア外に富を流出させない。断熱、建築、社会の構造 の作り方も、今からできることから作り替えていくことが必要。

忘れてはいけないのは、誰もやりたくないことがあるということ。それらを自治体に丸投げしていたら職員がやめていく。だから楽しくやれる方法を考える必要がある。だからその一つにテクノロジーがある。

自分の暮らしは自分でつくる。でも、つくれない人もいる。そういう市民を想像していないのではなく、心を開き、かかわり合いを聞く人がすごく必要。そうした「社会的処方」が地方にとくに必要になると思う、そういう活動を広めていきたい。

<コメント:青木座長>

社会的幸福を満たすことが福祉。

心の幸せと同時に満たすことが大事。

次は、そのヒントになるような話を建築というテーマで竹内さんに話していただく。

19:15-19:55 < レクチャー: 竹内氏>

今日は、地域経済と健康な暮らしに欠かせない、エネルギーの話と断熱の話を主に話していく。

住まいと健康のリノベーションという本があって、60歳すぎで何をしようかと考えた ら、住まいのことを考えた方がいいという本。

私の家十分にあったかいって思っている人、どれくらいですか? (会場内手を上げず) あったかい家とは何か。具体的に言うと、屋根に断熱材20cm,壁に10cm入っている家の こと。実際には、家の断熱材の状況を知らない人がほとんど。

家があったかくなると、活動的になり、幸せに過ごせる。寒いとこたつに入ってばかりで動けない。過去、断熱リノベーションした家の人から「便秘が治ったの」と言われた。寒い家で治らなかった体調不調が、あったかい家にすることで薬を使わないで治る。健康な毎日を手に入れられる。

次にエネルギーと気候変動の話。気候変動は地球温暖化しているから、洪水が起こっているって社会が認め始めた。だから気候変動に対して、二酸化炭素を減らすことが、僕らの義務。

スエーデンの高校生。グレタ・トゥーンベリさんが何と言ってるか知ってますか。「大人は何もしてくれない」「大人はできるできると言って、やってくれない。」と言っている。 ヨーロッパでは若い人たちがデモをして、気候変動に対する対策を訴えかける時代。

日本の消費エネルギー全体の34%が、建物で使われているエネルギー。家の中では家電、 暖房、給湯にエネルギーを使っている。日本は寒い国。鹿児島でさえ、冬に一度くらい雪の 降るところでは暖房を使っている。

2030年までに経産省が出している全体のCO2削減目標が何パーセントか知っていますか?

→全体で26%削減。産業部門はこれまで徐々に減らしているから7%、建築は増え続けているから40%を削減しなければ到達できないという試算。ということは、今お使いのエネルギーで、再生可能エネルギーの割合を40%にすればいい。これ、現実的にどこのエネルギーをどう変換するのが妥当でしょうか?

ここで建築の話。建築からみたCO2削減:みなさんができること。

エネルギーを減らすために断熱を実施する。そうすればエネルギー経費もCO2も減らせて、暖かくて健康になって、いいことだらけ。

ドイツは確実に減らしている。日本がこれまで一番減らせたのは2010年。なんでかなと思ったら、要因は震災ではなく、リーマンショックで経済が揺れ動いて産業活動が影響を受けたことだった。もちろん震災でも減った(計画停電)。以降、日本の削減目標は甘いというのが実態。

ドイツは再生可能エネルギー40%。日本は14.7%。もっと少ないと思っている人にとって は想像より高い感じではある。中身は、風力や水力などで取り組んできた分。 いつになったら目標を到達できるのか?よく会場で聞いてみると2100年くらいじゃないかという声がある。それって「(自分がいなくなった後)俺は知らないぞ」という態度と同じ。ドイツでは2050年までに80%まで削減すると本気で市民が思っている。ちゃんと削減しないと、どんどん気候変動が起こっていくから自分らがちゃんとやろうという考え方。

オーストリアで見たバイオマス工場では、チップを燃やして電気を作っている。花巻の発電所で岩手県の木材を使って年間1万4千世帯のエネルギーを供給できる規模。自分たちのものを自分たちで作っている、という状況がつくれているのが良い。

花巻市3万7千世帯、残りの2万3千世帯は→断熱して、建物が使うエネルギーを減らせばいいのではと思う。

バイオマスは何が良いのか、サトウキビを考えてみる。サトウキビは光合成をしてco2を吸収し、僕らはサトウキビからアルコールをとって車を動かす。CO2の量は増えてない。これがカーボンニュートラルの考え方。つまり、空中にもともとあったCO2は植物に一旦貯められて、それを燃やしてCO2になるだけだから、CO2発生量はゼロという考え方。これを考えた人は天才だと思う。

ドイツでもバイオマスエネルギーは全体エネルギーの10%程度だが、そこにあるもの、自分の地域で調達できる材料を使うことに意味があると考えられている。しかも、バイオマスエネルギーを熱に変えてに使うことは、電気に変えて使うのに比べて効率が断然いい。電気で沸かしたお湯はお湯のまま使うということ。バイオマスの原料は基本的には薪。日本は国土の67%森だから、これを活用するのは正解。地域で育ったものを地域で使うことに意義がある。CO2を減らすために海外で育った木を日本で燃やすのは可能だけど、産業の循環を考えると日本のためにはならない。

花巻はどのくらいのエネルギーを使っているか?

家庭で使っているエネルギー1世帯30万円として、3万世帯としてみると単純に花巻全体で90億円の経済規模となる。家庭活動と民業活動と産業活動が概ね同じくらいエネルギーを使っているといわれているので、300億円の経済規模。このエネルギーに使っている300億円を地場産品の飲み食いに使うことにしたら、地域の経済が変わると思う。そして、日本全体を見ると、化石燃料の輸入額が20兆円という巨額なお金。このお金を少しでも国内で回せたら、様々な問題も少しは変わってくるのではないかと思う。

住まいの断熱は実は大きな問題。ヒートショックでなくなる人は年間19,000人。東北は少ないほうだが、こうしてみると岩手県は意外と多い。実は北海道は一番少ない。

冷え性だ、という人はいるか?(会場内ちらほら)実は冷え性という疾患はない。これは 家が寒いということ。個人差もある。むしろ体が丈夫な人は冷え性になっていない。土建屋 さんなどバリバリ体動かすような人は体が強いから寒さにも強く、肩こりや冷えを感じな い。体が冷える人は人体が悪いのではなく、家が悪い。家が暖かくなれば冷え性は治る。

日本の家の状態は裸にカイロをしている状態。熱を与えてもどんどん空中に漏れて行って しまう。建物にとって断熱はセーターで、気密はウインドブレーカーの役割を果たす。 S55年の規格で建てられた家が圧倒的に多い。そのころの家の断熱材はほとんど3~5cm程度。最近の基準で建てられ、温熱環境がちゃんとしている家はわずか5%。「住まいは夏が大事」としてきた吉田兼好さんの影響か。

山形で試験的に建てたエコハウスには、トリプルサッシの開口部と屋根・壁に30-40cmの断熱材を入れて、地域の木材で建てた。工務店には、高すぎてお客さんからクレームが来るからやめてくれ、と怒られる。これは消費者側にも問題があると思っている。この屋根に太陽光発電を乗せてエネルギーを売電しているので、年間のエネルギー費用は2700円かかっただけ。

紫波町のオガールで、経済の地域内循環をさせるために、地域材を使って建てよう、という企画をプロデュースした。大手の住宅メーカーで断熱をちゃんとやっているところは実は少ない。断熱材20-30cmでは悪くはないが十分とは言えないので、紫波では30cmの屋根断熱を義務付けた。

補助金は使わず「このエリアではこの規格で立てて」と義務付けただけ。家は高くはなる けど子供の代に渡せる家が作れる。個人の家で小さく地域経済を回すことができて、喘息や アレルギーが治って、いいことしかない。

新築だけが断熱対象じゃない。中古住宅でもいろんな工夫で断熱すると快適になれる。断熱障子というものがある。普通の障子の表と裏に断熱パネルを入れて空気層4層に増やす構造。そして、最近の問題意識は小学校での冷暖房。夏の猛暑で熱中症が起こるけれど、断熱なしで冷房をかけるとすごいエネルギーがいる。試しに空き教室一か所を断熱して比べてみたら、エネルギーが2分の1も違うことが分かった。おすすめは断熱ブラインド。ハニカムになっているものをつけるだけで、窓断熱になる。最初は「そんなことしなくたって」と文句を言っていて半年試した人が「すごくよくなった、何故もっと早くやらなかったの」と言うくらい。

断熱して、エネルギーを減らして、健康になって悪いことはない。人口減少で地方が衰退する、といって危機感から入ると重苦しくなる。ではなくて、冬でも暖かく快適な空間ができるようになるよ、と言って進めると、きっと眉間にシワを寄せなくてよくなる。

20:00-20:30<ディスカッション>※敬称略

青木)これらの話を聞いて、ありたいまちはどうあったらいいのか、取りいれたいことなど を感じたまま話しあっていきましょう。

清水頭) 一番感じたことは、特定の誰かがやらなきゃならないというのでなく、個々の想い と、やる気と、行動だ、ということはとても共感した。

どれだけの人が集まったからどれだけの経済効果か…と言う数字でなく、そこに住んでいる人たちの意識を変えるということが最も重要なこと。経済効果はその結果だと思う。

時間がかかっても、私だったら何ができるのかな、と考え続けてきたけど、間違ってないな、と思えた。女性という視点で考えていきたいなと思った。

他の街に住んで子育てしていて安心できたことは、子供が病気になった時にすぐ見てくれるお医者さんがいることはいいなということ。今の花巻は、その安心が減っている。そういう緊張感みたいなものを女性だけではなく、男性も考えていくようになってほしい。 まちなかに人を集めるには、子育て、住環境、教育。女性の視点をもってその分野に注

木村)女性だけでなく、誰でも住みやすい社会を考えていきたい。

力していきたい。

子供が障がいをもっているため、健康賃貸住宅を考えてきたが、それだけではなく障がい をもっている人が快く過ごせるグループホームを運営することにした。

- 青木) お子さんを育てるということを、街中で暮らす、育てるという視点ではどうか。
- 木村)まさに、まちなかでそういうものを建築したい。それがさらに、エコ的なものにできたらいいなと思っている。今竹内さんに相談中。
- 青木) これから建物を作っても、選ばれなかったり残らなかったり、将来空き家になったり するのは勿体無い。集合的な住まいで、住民が分かち合えるリビングとか快適な環境が街 中にあるといい。それはどんなふうに考えますか。
- 遠藤)木質で建物を作っていくこと。小学校が木造であると落ち着くのもそう。マテリアルとして木材を地域循環型で使っていくことのできる豊かな資源が、花巻にはある。熱であれば小さな循環をつくるのは花巻では可能。花巻バイオチップエナジーを電力以外の形でも活用できるようになると良いなと思う。将来こうしたインフラをうまくみんなで活用していけるようなまちづくりを、エリアとしてやっていけると良い。
- 青木)今日現場を見てきて、途中、副委員長がショッキングなニュースを持ってきた。琉球新報の記事、地域経済循環率で一番悪いのが岩手で75.5%だった。花巻では循環型エネルギーが進んでいるかもしれないが、まだまだできることがあるのではないか。
- 岡崎)竹内さんの話は何回も聞き、だいぶ頭の中に入ってきている。

細谷さんに1年前に会いプレゼンを聞いて驚いた。そもそも私も建設会社の倅として東京から帰ってきて、なんとかしないと食べていけないな、と思った時に、お二人と共通するのが、「自分だけ幸せになる社会はない」と早い段階で気付いたこと。その結果紫波町に関わることができた。

自分が経営する会社の20代の社員から、「ボーナスもらえるだけでも幸せです。給料をあげてほしいとは思っていない。ただ、岡崎社長が色々社長は賞をもらっているが、私たちの住んでいるアパートは寒いしどこにでもあるようなアパート。もし私たちの夢を少しでも叶えてくれるなら、社宅を作ってくれないか?」と言われたので、社員用に住宅を作った。5部屋とリビングの電気代は年間35万円。そしたらまた作ってくださいという社員が増えた。これは稼いで得た外貨を地域外に出さないという、地域にとっての福利厚生にもなる。

シアトルに本社を構えるアマゾン社やマイクロソフト社に魅力があるのではなく、たった50万人のシアトルのまちに魅力がある。地域社会の福利厚生を少しでも多くしていくことが大事。

今回オガールでエコハウスのために最後の土地を買った。今週竣工。来週オープンハウス。壁30cm天井40cmの断熱、試算の電気代は年間32万。南側はほぼ8割ガラス張り。オガールのエコタウンが完売したので、今度紫波町は第二のエコタウンをやる。

今までは建築性能的なところを押さえていたが、次はデザイン。エコタウンっぽいデザインを作る必要がある。躯体と断熱性能は下げない。

金融プログラムをやると良いと思う。環境制度により、金利が変わってくると言うもの。 フランスは2005年からやっている。日本は15年遅れている。金融支援がないのが課題だ と思う。エコ断熱、デザイン、金融、物流をつなげるとよいと考えている。

- 青木)紫波町のエコタウンがすぐ横にいい事例としてある中で、花巻はどう言う形で進めていくのか?同じ形にすると劣化コピーになる。花巻らしくなるようにはどうしたらいいか。
- 竹内) そんな難しい話ではない。花巻は意外と温まってきている。役所の中で健康に携わる 人と建築関係の人が関わってもらえると良いと思う。紫波町だから、ではなく、誰でもで きる。

性能基準を示すことで工務店の活動が妨げられると思われると、嫌煙されがちだけど、 紫波町では結局、高いものが売れるようになったので総合的には儲かっている。規制を強 化したことで、逆にチャンスが増えた。チャンスが増えたと思えるのであれば、それをど こでもやれば良い。どこでもできる。

実感できる人が役場の中で動いていただけると、すごく可能性が増えると思う。

- 青木) 今の話を受けて、エコや住宅や取り組んで見たい人は?(5人挙手) どんな形で取り 組んでみたいですか?
- 小友) 今日ちょうど自宅の断熱工事をやっていた。福田君にお願いし、8畳2間の2部屋目をやった。最初にやった部屋は、天井が高いから、天井だけ35mmの断熱を貼っただけ、経費40万弱。それでも母親がとても満足している。最近目覚めが良い、と言っている。2部屋目は 畳の下と障子。竹内さんの学びを受けてもうちょっと本格的に60万くらいかける。これ から随時自分の部屋でもやっていこう、と言うのが一つ。

もうひとつは、小学校に、自分たちでお金を出して勝手に断熱しちゃおうかと思っている。やってみてから、市に提案したい。市には即効果を測ってほしい。子供と一緒にやると、子供達も楽しめて効果がわかる。

- 木村) オガールタウンのように花巻でやる場合、花巻タウンをいきなりやるのは難しいと思っている。建てたもの、建てるものに対して、認定するような形はどうか?
- 竹内) ちゃんとやっている人をちゃんと認めてあげる、と言うのは行政にしかできないこと。たまにはオープンハウスをしたり、効果を体験することができると良い。体感した人が次のところに言って、広めてくれるかもしれない。

断熱建築をポジティブに持ち上げてくれると言うのは、政策として重要だと思う。市の 人には、勉強してもらった方が良い。

- 青木)時間は過ぎているが、せっかくなので手を挙げていただいた方にもう少しお話を伺い たい。
- 平賀) 自分は農家で作ったものを自分で作ったカフェで提供している。細谷先生の話であったように、プロセスを知って食べてもらうことをコンセプトにしている。そういうことが、間接的に処方箋になっていく、と言うことに一躍を担えたらいいなと思って密かにやっている。あと断熱。自宅をリノベーションして住んでいるが、2階がまだ手付かずなので勉強してやっていきたい。
- 佐々木江)私の会社は母が創業したのだが、創業した理由が子供を育てるためだった。そうして家づくりをする中で大事にしたのがあったかい家。子供が安全に住めるように。それを30年続け、私が2代目として継承している。

家作りが自分達だけでなく、誰でもできるものとしてそれがスタンダードになるように していけたらと思う。私たち工務店も、一生懸命高性能な建築を作るが高性能によって暮 らしがよくなる、と言うことまでなかなか伝えられていないので、それをもっと伝えてい きたい。

照井) 東北など寒い地域は引きこもりなど、閉じこもってしまう人が多い。

今やっている喫茶店も夏暑く、冬寒い。実家の花屋の2階も屋根断熱が入っておらず、夏 暑すぎていよいよ避難しなければならないほど。

まちの遊休不動産を使うのはまちにとっても良いことだと思ってとりあえず利活用してみたが、工務店さんからは断熱の話は出てこなかった。後になって断熱のことを知った。 リノベーションする時にはエネルギーのことは全然検討項目に入っていなかった。今は、 みんなで勉強して、やるときに色々アドバイスしてもえる環境が花巻にも出てきている し、それが良いことだと思う。

- 青木)時間も押しているので、本来私が統括すべきところだが、長井委員長から。
- 長井) 今日は構想の話を深めたかったが、断熱のインパクトが強かったので、まとめるのが 大変そう。事務局頑張って。あと妻が寒がりなので、個人的にも今日聞いた話は実現にし たいと思う。行政のできることは多くはないが、その中でもできることがあるだろうと思 ったので、もう少し私たちで勉強もしていきたい。

この場にいる人だけでなく、断熱ってこんなにいいんだよ、というのを話していってほ しいのと、市議会の人とも考えていきたいと思った。

今後のことを考えると、教育が一つテーマになるかなと考えている。今後も断熱という話に限らずテーマ毎に深めていきたい。構想の具体的な形まで踏み込めなかったが、今後も引き続きよろしくお願いしたい。

青木) 花巻が失ったものはまちなかの日常。豊かさと賢さ。その両方を叶える暮らしが今日 のテーマだったと思う。

大事なのは原体験。小さいお子さんに対して、学校の教室をお父さんが出資して「一緒に」やる、未来に残ることをやる。森林率が高い花巻だからこそできること。

来年、おもちゃ美術館もできるが、子供達にとって、ここだから体験できることをどう 大人が施していくのかが、未来の子供達にできることなのではないか。

花巻のこの大地を未来の子供たちから預かっている、と考えると、今日の2つのテーマは とても本質的なものだった。大事なのは自分ごとでどう変えていくか。

1回目は会場の意見を拾うことができなかったが、ぜひまた参加して、よかったなと思うことがあれば、周りに伝えてください。次回のテーマは子育てと歩車共存です。

(20:40 閉会)